

外国語活動における一人一台タブレット端末を使用した プレゼンテーションの研究 —小学生のシャイネスと公的自己意識に着目して—

Research on English Presentation Using Student's Own Tablet PC in Foreign Language Activity: Focus on Shyness and Public Self-Consciousness of Elementary School Students

蜂谷 真穂^{*1}, 野崎 俊彌^{*2}, 北澤 武^{*3}

Maho HACHIYA^{*1}, Toshiya NOZAKI^{*2}, Takeshi KITAZAWA^{*3}

^{*1,2}東京学芸大学教育学部

^{*1,2}Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

^{*3}東京学芸大学情報科学分野

^{*3}Department of Technology and Information Science, Tokyo Gakugei University

Email: a151419g@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし：本研究では、小学生のシャイネスと公的自己意識の高低に着目し、一人一台タブレット端末を使用した外国語活動において、自分のプレゼンテーション動画をタブレットで振り返る授業の前後で、自己効力感、自尊感情にどのような差異が生じるかを比較分析した。結果、シャイネスが高い児童は、自分の動画の振り返りがプレゼンテーションに対する自信に影響するものの、自尊感情を高める必要性が明らかになった。一方、公的自己意識が高い児童は、自分の動画を振り返ることを楽しみつつも、自身のプレゼンテーションに満足しづらくなり、振り返る時に良い点を多く言いあうことが大切であると分かった。

キーワード：外国語活動、一人一台タブレット端末、プレゼンテーション、シャイネス、公的自己意識

1. はじめに

小学校新学習指導要領では、外国語で自分の考えや気持ちなどを、基本的な表現方法で発表する力が求められており⁽¹⁾、外国語活動では、相互作用の機会を多く与え、他者との関わりを充実させることが重要である⁽²⁾。加えて、他者と自分のプレゼンテーションを映像で比較しながら振り返ることは、良い点や改善点の自己評価や自信に繋がる利点がある⁽³⁾。そこで外国語活動において、タブレット端末で各々のプレゼンテーションを撮影し、他者とプレゼンテーションの映像を振り返る授業形態を導入すれば、自分の考えや気持ちを英語でプレゼンテーションする自信に繋がると考えられる⁽⁴⁾。だが、シャイネスや、賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求をもつ公的自己意識の高低によって、英語でプレゼンテーションする自信や自尊感情などに違いがあることが予想されるため、これらの関係を明らかにすることが課題となっている。

そこで本研究では、学習者特性として児童のシャイネス⁽⁵⁾、賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求をもつ公的自己意識（以下、公的自己意識）⁽⁶⁾の高低に着目し、一人一台タブレット端末を使用した外国語活動において、他者とプレゼンテーションの映像を振り返る授業に着目した。そして、授業の事前事後で、英語に対する態度やコミュニケーション、タブレットを使用した振り返りへの考え方、プレゼンテーション力、自己効力感、および、自尊感情がどのように変化するかを分析することを目的とする。

2. 調査概要

2.1 プレゼンテーションの映像を振り返る授業

2017年9月21日（木）第4校時に、都内公立小学校6年生28名（男子：15名、女子：13名）を対象に、プレゼンテーションの映像を振り返る授業を実施した。具体的には、一人一台タブレット端末で、自分のプレゼンテーションを撮影し、ペアでプレゼンテーションを振り返った後、再び、ペアでプレゼンテーションを行った。そして、一部の児童は、クラスメートの前でプレゼンテーションを行った。

2.2 質問紙

シャイネスと公的自己意識の傾向を分析するため、シャイネスは相川（1991）を参考に「他人の前では、気が散って発表できないと思いますか」などの4項目⁽⁵⁾、公的自己意識は菅原（1986）を参考に「誰からも変な発表だと思われたくないですか」などの3項目を5件法で問うた⁽⁶⁾。各項目の回答の得点を合計した後、平均値を算出した。平均値より高い者を高群、平均値より低い者を低群と定義した。

事前・事後調査では、英語に対する態度、コミュニケーション、タブレットを使用した振り返りへの考え方、プレゼンテーション力、自己効力感、自尊感情に関する質問を計26項目（5件法）問うた。また、事後調査ではタブレットの振り返り活動における良い点と改善点についての自由記述を求めた。

2.3 分析方法

シャイネスと公的自己意識の高低による差異を分析するために、事前・事後調査の回答結果を二要因

の分散分析（対応あり）で比較分析した。

3. 結果と考察

3.1 シャイネス

シャイネスの低群は13名、高群は15名であった。「15. タブレットで自分のプレゼンテーションを振り返ることによって、みんなの前でプレゼンテーションをする自信がつくと思いますか ($F(1, 26) = 4.86, p < .05$)」に交互作用が認められた。単純主効果の結果、事前の段階では、シャイネスの高群は低群よりも平均値が有意に小さかった ($F(1, 36) = 9.68, p < .01$)。だが、シャイネスの高群は事前と事後に有意差が認められ ($F(1, 26) = 15.02, p < .01$ (事前: 1.93, 事後: 2.87)), Bonferroniの多重比較の結果、事後の平均値が有意に向上した ($p < .01$)。また、シャイネス高群の自由記述では、「みんなの前でしゃべるのは、あまり得意じゃなかったけど、意外とうまくできてよかった」という自信につながるような回答が得られた。

一方、自尊感情の質問項目である「21. 自分のプレゼンテーションで行う工夫や表現が良いと判断できますか」では、単純主効果の結果、事前 ($F(1, 45) = 4.32, p < .05$) (低群: 3.31, 高群: 2.67) と事後 ($F(1, 45) = 5.26, p < .05$) (低群: 3.31, 高群: 2.60) に有意差が有り、いずれも高群の平均値の方が有意に小さかった。同じく自尊感情の「26. 自分のプレゼンテーションはより良いものにできる様々な可能性があると思いますか」の項目では、事後に有意差が認められ ($F(1, 43) = 6.09, p < .05$) (低群: 3.85, 高群: 2.87), 高群の平均値が有意に小さかった。これらの結果から、社会的不安を比較的感じやすい児童は、タブレット端末を用いて、友達と自分のプレゼンテーションを振り返ることで、予想よりプレゼンテーションができたと感じ、プレゼンテーションをする自信につながる可能性がある。しかし、自尊感情を高める方法は、今後の課題である。

3.2 公的自己意識

公的自己意識の低群は17名、高群は11名であった。「17.自分のプレゼンテーションに満足しますか ($F(1, 22) = 4.98, p < .05$)」に交互作用が認められた。単純主効果と多重比較の結果、事前の段階では、公的自己意識の高群は低群よりも平均値が有意に大きいことが分かった ($F(1, 35) = 6.47, p < .05$)。だが、高群は事前と事後に有意差が有り ($F(1, 22) = 9.19, p < .01$, (事前: 3.55, 事後: 2.73)), 事後の平均値が有意に減少したことから ($p < .01$), 低群との差を縮める結果となった。

また、「4. タブレットで友達と自分のプレゼンテーションを振り返る活動は楽しいと思いますか ($F(1, 26) = 15.99, p < .01$)」の項目は、公的自己意識の高群の事前と事後に有意差が認められ ($F(1, 26) = 14.38, p < .01$), 事後の平均値が有意に大きかった。

「7. タブレットで友達と自分のプレゼンテーションを振り返る時、どちらかという改善点だけを言

ってもらいたいですか ($F(1, 26) = 5.90, p < .05$)」の項目は、事前 ($F(1, 35) = 4.98, p < .05$, (低群: 2.88, 高群: 2.27)), 事後 ($F(1, 35) = 4.98, p < .05$, (低群: 2.88, 高群: 2.27)) とともに、公的自己意識の低群よりも高群の方が、平均値が有意に小さかった。

これらの結果から、公的自己意識が高い児童は、タブレット端末を用いて、友達と自分のプレゼンテーションを振り返る活動に楽しさを見出す一方、満足しづらくなると判断できることから、振り返る時に良い点を多く言いあえるようにすることが大切であると考えられる。

4. おわりに

本研究では、一人一台タブレット端末を使用した外国語活動のプレゼンテーションを振り返る授業を対象に、シャイネスと公的自己意識に着目し、英語に対する態度やコミュニケーション、タブレットを使用した振り返りへの考え方、プレゼンテーション力、自己効力感、自尊感情の変化を分析した。結果、シャイネスの高い児童はプレゼンテーションの自信に繋がるものの、自尊感情を高めていく必要があり、公的自己意識の高い児童は振り返りを楽しみながらも現状に満足しづらくなり、振り返る時に良い点を多く言いあうことが大切であると明らかになった。

今後の課題として、シャイネスや公的自己意識の学習者特性に着目しつつ、本研究の実践後に変化が同一項目に多く認められた原因を分析したり、本研究の知見を活かした効果的なタブレット活用の授業実践を多くの教科・単元で実践し、効果検証の結果を蓄積したりすることが重要である。

謝辞

本研究の一部は、科研費(18K02814)の支援を得た。

参考文献

- (1) 文部科学省: “小学校学習指導要領(平成29年3月公示)”, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf (参照 2019.1.15)
- (2) 廣森友人: “英語学習における動機づけを高める授業実践: 自己決定理論の視点から”, 外国語教育メディア学会機関誌, 43, 111-126 (2006)
- (3) 田中雅章, 神田あづさ, 大森晃: “動画の振り返りによるプレゼン技術向上の提案”, 第9回情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集, 109-114 (2012)
- (4) 蜂谷真穂, 野崎俊彌, 北澤武: “外国語活動における一人一台タブレット端末を使用したプレゼンテーションの研究—異なる授業形態によるプレゼンテーション力・自己効力感・自尊感情の変容に着目して—”, 2017年度JSiSE学生研究発表会 (2018)
- (5) 相川充: “特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究”, 心理学研究, 62(3), 149-155 (1991)
- (6) 菅原健介: “賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自己意識の強い人に見られる2つの欲求について—”, 心理学研究, 57(3), 134-140